



犬 猫

を拾ったら

を拾ったら

神獣 聖獣

で

で

最強

すぎて

③ 困る

Neko wo hirottara Seiju de
Inu wo hirottara Shinju de
Saikyo sugite komaru

著

マーラッシュ

Illustration: たば



マシロ

高飛車な性格の聖獣・白虎。一族の掟に従い、天界から降りてきた。美味しい餌に目がない。

主な登場人物

ユート

本作の主人公。勇者の横暴に飽き飽きしてわざとパーティーから追放された冒険者。天界で暮らしていた経験から、並大抵のことでは驚かない。

ノア

生真面目な神獣・フェンリル。事情があり下界で暮らしている。食欲に忠実なマシロに呆れることが多い。



ルルレーニャ

バルトフェル帝国の公爵令嬢。家族に疎まれていと感じている。

リズリット

ムーンガーデン王国の王女。ユートに助けられたことをきっかけに、行動を共にする。見た目に反してよく食べる。

フィーナ

ガーディアンフォレスト王国の王女。かつては同族のエルフ達から傾国の姫と呼ばれていた。



プロローグ

俺——転生者のユートは今、ムーンガーデン王国のお姫様であるリズことリズリットと、聖獣のマシロ、神獣のノアと共に城の廊下を歩いている。

ここはエルフの国、ガーディアンフォレスト王国だ。

まさかエルフの国に来るとは思ってもみなかった。

俺達はムーンガーデン王国に戻る準備をして、待ち合わせ場所である城門へと向かう。

城門にたどり着くと、ガーディアンフォレスト王国の王女のフィーナ、そして見たことのないエルフの中年男性が俺のことを待っていた。

「時間通りね。さあ行きましょ」

「いや、ちょっと待って。こちらの方は？」

「えーと……ヨーゼフよ。私のお目付け役。お父さんの差し金でついて来ることになったの」

なるほど。フィーナとしては、ヨーゼフさんについてきてほしくないといったところか。少し不機嫌に見えるのは気のせいじゃないだろう。

「ヨーゼフです。お見知りおきを」

「ユートです。よろしくお願いします」

なんだかヨーゼフさんから庄を感じるのは気のせいかな？

仏頂面だし、怒っているのか顔が赤い。俺のことが……いや、人族のことが嫌いなものかもしれない。

もし俺の考えている通りなら、これからの旅は少し気が重いな。

「ユート、気にしないでいいわよ。ヨゼフは寡黙^{かもく}なだけで、人族が嫌いというわけじゃないから」
表情に出ていたのか、フィーナが心配して声をかけてくれた。

「むしろ、漆黒^{シヴァイグナフ}の牙を倒した猛者^{もて}と旅ができるなんて光栄だつて言つてたし」

「そうなの？」

俺はヨゼフさんの方をチラリと見る。視線が合うと、ヨゼフさんは明後日^{あさって}の方を向いてしまった。

えっ？ 何？ ヨゼフさんの顔が赤い理由は、単に恥ずかしかっただけってこと？

フィーナはそう言っているが、にわかには信じられない話だ。

「ヨゼフは恥ずかしがり屋だから、いないものとして扱った方が本人のためよ」

「本当に？」

確かに、ヨゼフさんは首を縦に振っていた。

どうやらフィーナの言うことが正しいらしい。

それならあまり気にしないでもいいのかな？

「それじゃあ行くわよ。マシロ、ノアおいで」

「あつ！ フィーナさんずるいです。独り占めはダメですよ」

リズがフィーナに文句を言った。

「……わかったわ」

フィーナはマシロを肩に乗せ、リズはノアを抱っこする。

相変わらず、マシロとノアはお姫様達に大人気だな。

護衛になるので、どちらかが常に二人の側^{そば}にいてくれるのは、俺としても助かる。

そしてフィーナとリズがムーンガーデン王国へと足向け、俺とヨゼフさんも後ろからついて行く。

「何もトラブルがなければ、明後日には城に到着できると思います」

チラッ。

「僕は何か起きる予感がします」

チラッ。

「あなた達の話を聞く限り、何が起きてもおかしくないと思うわ」

チラッ。

「とにかくこれ以上面倒なことは起こさないください。ユート、わかりましたね」

「俺は何もしてないぞ。トラブルの元みたいな言い方しないでくれ」

リズとノアとフィーナはチラリと俺の方に視線を送るだけだったが、マシロは名指しで注意してきやがった。

俺だつて好き好^{こゝろ}んでトラブルを招いているわけじゃない。この異世界での目標は、のんびりとスロライフを送ることだからな。

でも天界から地上に降りてきてから、本当にトラブル続きだよな。マシロとノアを拾って、リズ

と知り合い、ムーンガーデン王国の跡目争いにも関わってしまった。そしてフィーナと出会ってエルフの国、ガーディアンフォレスト王国に来て神剣を抜き、魔獣漆黒の牙を倒してフォラン病にかかった人を救っている。

そんな地上での生活も、最初は穏やかだった。

だけど、あの事件からトラブルに巻き込まれるようになった気がする。

あの事件とは、盗賊から公爵令嬢を助けたことだ。

あれがターニングポイントだったのか、その後バルトフェル帝国の皇子である勇者ギアベルのパーティーに推薦され、人生がおかしくなったように感じる。彼の横暴に耐えかねて、わざとパーティーから追放されたんだよな。

ただ今の俺は帝国の人間ではないし、ムーンガーデン王国とガーディアンフォレスト王国の争いの種になりそうなのは全て解決済みだ。

これからは俺が望んだスローライフが送れるはず。

そして俺の願いが通じたのか、一日目はなんのトラブルもなく、旅をすることができた。

しかし、二日目に事件は起こる。

「ユート、平原に誰か倒れています」

周囲の探知をしていたのか、マシロが突然驚愕するような言葉を口にする。

ここはもうムーンガーデン王国内だ。ムーンガーデン王国の人間は、漆黒の牙が討伐されたことをまだ知らないはず。

それなのに平原に足を踏み入れるなんて無謀じゃないか。

「どんな人かわかる？」

「いえ、そこまではわかりません。ただ西に一キロほど行ったところに人が倒れていると、風が教えてくれました」

一キロ先の人がわかるなんてさすがだな。

「ユート様」

「わかっている、リス。すぐに向かおう」

確率からすると、ムーンガーデン王国の人間の可能性が高い。王女としては、自国の民かもしれないから見過ごすことはできないだろう。いや、優しいリスならどんな人でもすぐに助けに行くか。「とりあえず先に行くから、みんなは後から来てくれ」

「わかりました」

リスに抱かれていたマシロが肩に乗ったのを確認して、俺は強化魔法を自分自身にかける。

そしてマシロの指示のもと、俺は倒れている人のところへ急ぐ。

走り出してから一分くらいで、目的の場所付近にたどり着いた。

「あそこです」

マシロが視線を向ける先には、確かに人がうつ伏せで倒れていた。顔は見えないが、セミロングくらいの長さの髪とスカートを穿いているところから、女性だろう。

そして、倒れた拍子でそうなってしまったのかはわからないが、スカートの裾が捲かれて白いものが見

えていた。

「ユート……」

マシロが怒気を含んだ声で睨んできた。

「私の世話係ともあろう者が、女性の下着をまじまじと見るなど許されませんよ」

「ま、まじまじとなんて見てないぞ。それより、意識があるのか確認した方がいいな」

俺は下着を見てしまったことを誤魔化すため、女性の肩を揺らす。

「大丈夫ですか？」

返事がない。まるで屍のようだ……というのは冗談で、女性は動く気配がない。

俺は心配になって首を触ってみた。すると脈を確認できたので、少なくとも生きているのは間違いないようだ。

俺が首に触れたからなのか、突然女性が……いや、女の子はゆっくりと起き上がると、俺と目が合った。

だがその瞳はぼんやりとしていて、焦点があつていないように見えた。

「えーと……だいじょう……」

俺が言葉を言い終える前に、女の子は驚きの行動に出た。

なんと、突然俺に抱きついてきたのだ。

予想外の行動に、俺は動くことができない。

女の子は俺の背中に手を回し、一言呟く。

「やっと会えた……」

「えっ？ えっ？」

わけがわからない。何なんだこの子は。

いきなり抱きついてくるなんて……痴女か？

まさか、俺を嵌めるための美人局ってことはないよな？

俺はこの女の子の行動にただ驚くだけだった。

しかも身長は大きくないのに、さっきから胸部付近に柔らかくて大きなものを感じるため、冷静な判断が奪われていく。

でもこの子……どこかで見たことがあるような……

聞き間違いじゃなければ、さっき「やっと会えた」と口にしていた。

過去の記憶を探ってみる。すると、突如首筋に軽い痛みを感じた。この子に囁まれた！

「はむはむ……お肉だあ。安い肉だけど、ここは背に腹はかえられません」

「誰が安い肉だ！」

もしかして、お腹が空いて倒れていたのか？ それなら、異空間にある食料を渡せば元気になるかもしれない。

けどその前に、まずはこの子を離さないと。

俺は抱きついている女の子を引き剥がすため、肩に手を置く。

だがこの時、俺は女の子に気を取られていて、周囲の状況に目がいつてなかった。そのため、こ

の場に近づいている者達に気がつかなかった。

「ユート！ 女の子に何をしているの！」

「ユ、ユート様……これはいったいどういうことでしょうか」

フィーナは怒りながら、リズは困惑しながら、こちらに近づいてくる。

「ちちち、違うんだ！ これはこの子がいきなり抱きついてきて！」

俺は正直にここで起こったことを口にする。

大丈夫。俺はやましいことは何一つしていない。きっと二人はわかってくれるはずだ。

「で、ですが、その肩に置いてある手はなんでしょう？ 自分の方に引き寄せてるように見えます」

リズが疑惑の目を向けてくる。

「逆逆！ 俺は離そうと思つて肩に手を置いただけだ」

「本当にそうかしら？」

フィーナも俺を睨んでいる。

えっ？ 俺ってそんなに信用しないの？

今までの冒険で信頼関係が強くなつたと思つていたのは俺だけ？

「信用されてないですね」

「マシロ、うるさいよ」

「ですが、この子の下着をジロジロ見ていた変態ですから、仕方のないことでは？」

この駄猫は何を口走っているんだ！

このタイミングでそんなことを言われたら、ますます二人は俺のことを信じてくれなくなるじゃないか。

「マシロさんは何を言ってるのかな！ 後で新鮮な魚をあげるから黙つてくれないか」

「わかりました。それで手を打ちましょう」

とりあえずマシロは黙らせただけ……

俺はチラリと二人に視線を向ける。だがフィーナはあからさまに怒っており、リズは不満げな顔を見せていた。

こうなったら無実を証明するためにも、この女の子に目覚めてもらうしかない。

俺は異空間から串に刺して焼いた肉を取り出し、女の子の口元に持つていく。

「ほら、肉だぞ。これを食べて、俺が何もしてないことを証明してくれ」

「クンクン……クンクン……お肉……ですか！」

匂いから、これが本物の肉だとわかると、女の子の意識が覚醒する。

そして、一心不乱に肉をむさぼり始めた。

「ムシャムシャ……美味い！ 美味しいです！」

それはよかった。だけど、そんなに急いで食べると……

「うぐっ！」

俺の予想通り、女の子は肉を喉に詰まらせてしまった。

やれやれ。俺は異空間から瓶に入った水を取り出す。

「これを飲んでくれ」

女の子は慌てた様子で水を飲む。そんなに急いで飲むと、今度は別のことが心配になってしまう。何故ならこの水は……

「あうっ！ 頭が痛いです！」

女の子が額を押さえてうずくまる。

「なんでこんなに冷たい水があるんですか！ 私が普段向けられている視線と同じくらい冷たいです」

悲しいことを言うなあ。

この子は辛い人生を送っているということか。なんだか涙が出てきてしまいそうだ。

「もちろん冗談ですよ。私のような美少女がそんな目で見られるわけじゃないですか。見られるとしたら、舐めるような、いやらしい視線だけです」

「そ、そうなんだ」

さっき抱きしめられている時、その大きな胸を堪能したからな。だけどそんなセクハラまがいなことを口にする勇氣はない。

でも、これまでの言動で一つわかったことがある。この子の正体だ。

初めて会った時はベールのような薄い布で顔を隠していたからわからなかったが、この声は間違いない。

「それで、あなたは誰なの？」

「どうしてユート様に抱きついていたのでしょいか？」

フィーナとリズが女の子を問い詰める。

わざわざ俺が言わなくても正体がわかりそうだ。

女の子は頬を赤らめながら、ゆっくりと口を開く。

「ユートさんは……私の初めての方です」

その言葉は俺にとつて、とても容認できるものではなかった。

この子は何を言ってるんだ！ 初めての方？ そんな記憶全くないけど！

だが俺はないと思っても、その言葉を聞いたフィーナとリズは違った。

「初めての方!? やっぱいいかがわしいことをしていたのね！」

「初めての方とはどういう意味でしょうか？」

フィーナはその意味がわかっていて、リズはわかっていない。

意外にもフィーナは耳年増で、リズは相変わらず純粹無垢だな。リズはこのまま汚れないで育ってほしい。

それにしても、この子はどういうつもりなんだ？

俺の人間関係を壊すのはやめてほしいぞ。

「君はここでちょっと待っててくれないかな」

「わかりました」

これ以上この子が介入すると、ろくでもないことにしかならない気がしてきた。ここは俺だけで誤解を解いた方がいいだろう。

俺は女の子を置いて、フィーナ達のもとへと向かう。

だが俺が話す前に、リズに抱っこされていたノアが、女の子に聞こえないように、小さな声で質問をする。

「フィーナさん、僕も『初めての方』の意味がわからなくて。教えてもらえませんか？」

すると、フィーナが顔を赤くして慌て始めた。

「そそ、それは……雄しべと雌しべが合わさって……」

「花は今関係ないですよね」

知らないとはいえ、ノアはフィーナの遠回しの言葉をバツサリと切る。

「だからその……子供が寝た後の時間におせつせするとコウノトリが来て」

間違っではないけれど、恥ずかしがって説明するフィーナの姿は少し萌えるな。もしかして、俺にはDSの属性があったのか？

「よくわかりません。おせつせってなんででしょうか？」

ノアの鋭い質問がフィーナに飛ぶ。

これは、俺もなんて答えるか興味あるな。

「わ、私知らないから！ ユートが答えなさい」

「ええっ！」

フィーナはさらに顔を真っ赤にさせながら、こちらにキラースパスを出してきた。
嫌な役をこっちに回さないでほしい。

「ユート様、私もおせつせの意味が知りたいです。教えてください」

美少女に卑猥な言葉を言わせると、なんだかすごく悪いことをした気分になるな。それが純粹無垢なリズならなおさらだ。

だけど、なんて答えればいいのかだろうか。正直に言うわけにもいかないし。

俺がどうすればいいのか迷っていると、待ちきれなくなったのか、助けた女の子がこちらに向かってきた。

「もういいですか？」

よくないけど、女の子が来たことでノアの質問を有耶無耶にできるかも。

「えーと……君は、前に盗賊から助けた子だね？」

そう。この声は、以前帝国で盗賊に襲われていた女の子のものと同じだ。

「えっ？」

「盗賊から？」

フィーナとリズが反応する。

「はい。その通りです。初めて盗賊に襲われて、初めて私を助けてくれた人です、ユートさんは」
そういう意味だったの？ 紛らわしい言い方をするなあ。

「初めて」とはそういう意味だったのですね」

「わ、私ははじめからわかってたわよ」

リズに続いて、フィーナが白々しいことを口にする。さっきまで、まるで俺を性犯罪者のような目で見ていたよな？ このことは忘れないぞ。

「ルルレーニャ・フォン・ニューフィールドさんだね。公爵令嬢の」

「一度しか名乗っていないのに、控えめな私の名前を覚えてくれているとは思わなかったです」
「そ、そうだね」

控えめ？ この子は何を言ってるんだ？ 明らかに騒がしい系だろう。でも確かに初めて会った時は、こんなにお喋りではなかったように感じたな……

「ルルレーニャ様は何故このようなところにいらっしやったのですか？」

リズの疑問はもつともだ。公爵令嬢が他国で、しかもこのような何も無い平原にいるなんて信じられない。

言っちゃ悪いけど、もし俺達が見つけなかったら餓死していたか、魔物の餌になっていたぞ。

「私のことはルルでいいですよ。ルルレーニャなんて長くて言いづらいですね。フランクに話してくれて大丈夫です。私がここにいる理由をお話する前に、やらなくてはならないことがあります」
ルルの雰囲気が変わった。先程までお茶らけた感じだったが、突然背筋を伸ばし、姿勢を正す。

そして俺に向き合っていると、頭を下げた。

「ごめんなさい」

思ってもいなかった言葉に、俺は驚いてしまう。

「私がギアベル皇子のパーティーに誘ったことで、ユートさんはひどい目に遭って、帝国から追放されてしまうなんて……」

ギアベルか。確かに、俺はルルの推薦でギアベルのパーティーに入った。

「ギアベルのパーティーに入ることにしたのは、俺の意思だから。結果的に勇者パーティーになれたし、ルルが気に病むことじゃない」

「そう言ってくれると、少しは救われます。でも、ユートさんの不名誉だけはなんとかしないと、思っておじ様……皇帝陛下に追放処分を取り消してもらいました。私はそのことをユートさんに伝えるために、ここまで来ました」

「一人で？」

「はい。他の人を巻き込むわけにもいかないので」

わざわざ他国にまで来てくれたなんて。ルルは本当に責任を感じているんだな。

「そして、勇者パーティーの検証も行われています」

「勇者パーティーの検証？」

「はい。ギアベル皇子のパーティーが勇者パーティーになることができたのは、ユートさんのおかげではないかと」

隠れて支援していたのがバレたのか？

まあ、自分で言うのもなんだけど、ギアベルのパーティーはAランクの魔物すら倒すのが怪しかつたからな。妥当な判断だと思う。

「とにかく、これでユートさんは帝国に戻ることができます」

「そっか……ありがとう」

「これは私の罪滅ぼしですから。むしろ、このくらいのことしかできなくて……ごめんなさい」

「謝らなくていいよ。確かにギアベルのパーティーは最悪だったけど、あれがあったから今、俺は信頼できる仲間に出会えた」

もしあのまま山にある家に住んでいたら、探知ができるマシロは来なかったかもしれない。旅に出なければ、ノアやリズ、フィーナには会えなかった。

そう考えると、ギアベルに帝国から追放されて本当によかったと思う。

「いい出会いをしたということです。私との出会いもそう思ってくださいか？」

「もちろんだ」

「ありがとうございます」

ルルとの出会いが、俺の旅の出発点だから。俺にとってはよき出会いの一つだ。

だけど、一つだけ懸念事項がある。俺の追放解除について、ギアベルは絶対によく思っていないはずだ。

「ギアベル自身はどうなったのかな？」

「ギアベル皇子は謹慎中で、城から出ることは許されていません。それと、ユートさんに対して嫌がらせをした場合は、皇子の地位の返上を皇帝陛下は約束してくれました」

「そんなことまでしてくれたの？」

「はい。さっきも言った通り、ユートさんがギアベル皇子のパーティーに入ることになったのは、私の責任ですから」

さすがに皇族でなくなるなら、これ以上ギアベルが俺に関わってくることはないかも。

そんな約束まで取りつけてくれたなんて、ルルは意外にもやり手なのかもしれない。

ともかく、これで俺は安心して帝国に戻ることができるということか。

「それとユートさん。さっきから気になっていましたが、こちらにいる綺麗なお姉さま達はどなたですか？」

「ふふ……綺麗ななんて正直な子ね」

「綺麗だなんてそんな……」

フィーナもリズも容姿はとても優れているからな。でもルルも二人に負けないくらいの美少女に見える。

「私はフィーナ、見ての通りエルフよ」

「エルフさんですか。初めて見ましたが、本当に綺麗ですね。感激です」

ルルはフィーナと握手をかわす。

人間嫌いのフィーナが簡単に握手をするなんて、初めて会った時と比べると信じられないな。もしかして綺麗って褒められたからか？ もしそうだったらチョロすぎるだろ。

「私はリズリット・フォン・ムーンガーデンです」

「わわっ！ 王国のお姫様ですね」

「私のことはリズでいいですよ。私はルルちゃんって呼んでもいいですか」
「もちろんです。よろしくお願いします」

ルルとリズも握手をかわした。

「それと、あっちの無愛想なのが、ヨーゼフよ」

「ヨーゼフさんですか。よろしくお願いします」

ヨーゼフさんをフィーナに紹介され、ルルはペコリと頭を下げる。

「あと、こっちがマシロとノアだ」

最後に俺が二人を紹介すると、ルルの目が輝き出す。

「実は初めて見た時から気になっていました。とても可愛い^{かわい}ですね！」

「どうやらマシロとノアは、ルルにも好かれているようだ。この世界では若い女の子は子猫と子犬が大好きなのか？ 少し羨ましいぞ^{うらやま}。」

「それに、可愛いだけじゃなくて、何か普通の動物が持っていないオーラを感じますね」

「えっ？」

俺はルルの鋭い指摘に、思わず驚きの声を上げてしまう。

「わかるのか？」

「小さい頃から動物とは相性がいいのか、なんとなく」

何か特別な才能かスキルを持っているのか？ ここは異世界だから、何があってもおかしくない。

そのとき、マシロが呟いた。

「私にはわかります。この子……ティマーの才能がありますね」

「わわっ！ 猫さんが喋った！」

「いちいちうるさいですよ。ティマーは動物を手懐^{てなづ}けたり、召喚することができます。おそらくその影響で、私が持つ高貴なオーラに気づいたのでしょう」

この猫は自分で高貴とか言っちゃってるよ。相変わらず自分大好きだな。

「では、こっちのワンちゃんも……」

「僕は犬じゃなくて、フェンリルです」

「ワンちゃんまで喋った！ ここはパラダイスですか！ それとも、昨日道端^{みちばた}に生えていたキノコが毒キノコで、幻覚を見てるの？」

ルルはその辺に生えていたキノコを食べたのか！ 公爵令嬢なのに意外と逞^{たくま}しいな。

「ともかく、ここで話をしてもしょうがない。俺達は王都に行く予定だけど、ルルも来るだろう？」

「もちろんです」

こうして俺達は新たに公爵令嬢のルルを連れて、ムーンガーデン王国の王都ローレリアへと向かうことになった。

王都ローレリアへ向かう道中、俺はマシロと共に、前を歩く女性陣を眺めていた。

「本当ですか？ 私もリスさんのお部屋に行きたいです」

「いいですよ。王都に着いたら私の部屋でお話ししましょう」

「それなら何か甘いものでも買おうね。人族のお店を回るのが楽しみだわ」
今日知り合ったばかりとは思えないほど仲がいいな。

ルルは人の心に入り込むのが上手いのか、リスはともかく、あのフィーナまで心を許しているように見える。

「いやはや。これが若さというやつか」

「何をじじ臭いことを言ってるのですか？ ユートだって十分若いですよね」

「それはそうだけど」

マシロに突っ込まれたが、俺は異世界転生をしているから、見た目より人生経験が多い。

「フィーナ様がお友達と楽しそうに話しているのを初めて見ました」

俺達の後ろを歩いているヨーゼフさんがしみじみと語る。

まあ、フィーナはそもそも友達がいらないと言っていたからな。

「たぶん、ルルのコミュニケーション力が高いせいじゃないですかね」

フィーナやリズに対して物怖じせず、人懐っこい笑顔を浮かべている。

本当に大したものだ。俺もそんなにコミュニケーション力が高い方ではないから、素直に尊敬してしまふ。

そして俺達は、夕陽があたりを紅く染めた頃に、ローレリアに到着した。

「まずはお父様にご報告ですね」

漆黒の牙の討伐は国王陛下下の依頼でもある。リズには報告する義務があるだろう。

「では、みなさんで行きましょう」

俺達は城へと足を進める。

すると、道行く人達が話しかけてきた。

「リズリット様、戻られたのですね！」

「しばらく見なかったから心配したぜ！」

「腹減ってるだろ！ うちの串焼きを食べてきな！ お仲間の分もあるぜ！」

「ありがとうございます！」

城へ向かう中で、次々と人が寄ってきて差し入れをくれる。

もう両手が塞がって、持つことができないぞ。

「すごい人気ですね」

右隣にいるルルが感嘆の声を上げた。

その気持ちはわかる。こんなに好かれるお姫様が他にいるだろうか。

「これだけ民衆に支持されていたら、王位を乗っ取るのも簡単ですね」

「怖いこと言うなよ、ルル」

「冗談ですよ」

本当に冗談だよな？ リズは純粹だからルルが誘導して……いやいやないな。ないと思いたい。

「同じ姫でも私とは全然違うわね。私なんて、傾国の姫って呼ばれてたし」

そして左隣にいるフィーナはポツリと呟き、目の前の光景にうつむいてしまった。

「いや、確かに最初はそういう風に呼ばれていたけど、今は違うだろ？ 里に拡がったフォラン病を治すため、レーベンの実を手に入れた英雄じゃないか？」

「私が英雄？」

俺の言葉を聞いて、フィーナは顔を上げる。

「そうだよ。それに大地の恵みっていうスキルを持っていることから、エルフの国を作った初代女王の再来って呼ばれているじゃないか」

俺の中では、だけど。だが、今の言葉はフィーナにとって効果絶大だった。

「えへへ……そうかな」

落ち込んでいたフィーナが途端に笑顔になった。

ちよつと褒められただけでチョロすぎる。

将来絶対に誰かに騙されるだろ。一人では人間の街を歩かせることはできないな。

それにしても、リズを囲む人の波が切れない。このままだと、国王陛下のもとに到着する頃には暗くなってしまうぞ。ここは街の人達には申し訳ないけど、先に行かせてもらおう。

「リズ、城に到着するのが遅くなるからそろそろ行くぞ」

「あっ！ ユート様」

俺はリズの手を引き、人波から救い出す。

もしかしたら、このまま街の人達が追いかけてくるかもしれない。そうになったら走って逃げるしかないな。

しかし俺の予想に反して、街の人達が追いかけてくることはなかった。

むしろ生暖かい目で見守られている気がするけど、気のせいかな？

まあ、なにせよチャンスではあるから、このまま城に行かせてもらおう。

俺達は後ろから追いかけてくるフィーナ達と合流し、城へと歩き出す。

そしてすぐに、玉座の間へと向かった。

「お父様、お母様……ただいま戻りました」

「おお！ リズよ！ よくぞ無事に戻った！」

玉座の間に入ると、国王陛下と王妃様がリズのもとに駆け寄ってきた。

Sランクの魔獣、漆黒の牙の討伐に行った娘が帰ってきたんだ、二人とも安心しただろう。

「ユート様が、我が国の長年の憂いであった漆黒の牙を討伐してくださいました」

「なんだと！ それは真か！」

「さすがはユートくんね。私は信じていたわ」

「そしてユート様は、交流がなかったエルフとの間に繋がりをもたらしてくださいました」

「エルフ……だと……そんなバカな話があるか。エルフは人間のことを恨^{うら}んでいる。そのために国から出ず、人間との交流を断っているのだ」

国王陛下はリズの言うことを信じていない。その気持ちはわからなくもないけど、本当のことだ。そのことを証明するためか、背後にいたフィーナが前に出る。

「お初にお目にかかります。私はガーディアンフォレスト王国の第一王女、フィーナ・フォン・ガーディアンフォレストと申します」

さすがに本物のエルフを見れば信じるだろう。

しかし、国王陛下はフィーナを見ても反応がない。

まるで時が止まったかのようだ。

でも数秒経つと、突如狼^う狽^たえ始めた。

「お、王妃よ！ エルフが……エルフがいるぞ！」

「あなた、騒がしいです。フィーナさんに失礼ですよ」

「はっ！ そ、そうだな。まさか我が国でエルフの……しかも王女に会えるとは思わなかった」

「夢ではありませんわ。そして、こちらが私のお目付け役のヨーゼフです」

「ヨーゼフです」

「エルフが二人も！ 漆黒^{シユアルツァング}の牙は討伐されるし、エルフの方々は我が国に来るし、もう何がなんだか。ユートよ、とんでもないことをしてくれたな」

その言い方だと、俺が悪いことをしたみたいで嫌だな。

「人族の王よ、驚くのはまだ早いですぞ」

えっ？ なんだ？ ヨーゼフさんは何をするつもりだ？

ヨーゼフさんが国王陛下に手紙のようなものを渡す。

あれは、エルフの王であるエルウッドさんからの親書か？ 何が書いてあるのだろう。漆黒^{シユアルツァング}の牙

討伐のことか？ でもわざわざ親書なんか必要ないよな？ 直接俺カリズの言葉で伝えれば済む話だ。

「では、読ませてもらおう」

国王陛下は親書の中身に目を通す。

「な、なんだと！」

そして驚愕の声を上げ、驚きのあまり、その場に座り込んでしまう。

「あなた、親書には何が書かれていたの？」

王妃様が国王陛下の様子を心配し、問いかける。

今の驚き方からして、とんでもないことが書かれていたのは間違いないな。

エルウッドさんは親書に何を書いたんだ？

その答えはすぐに国王陛下が口にくれた。

「エルフの王が私と会談をしたいと言ってきたのだ」

「それは本当ですか？」

「ああ……場所は我が国でもエルフの国でもどちらでもよいと書いてある。今まで最低限の交流し

かなかったのに信じられん」

エルフの国は、人間に対する考えを変えたのだろうか？ もしそうだとしたら、俺とリズを見て、そう判断してくれたってことだよな？ それってすごく嬉しいな。

「父は国王陛下だけでなく、王妃様にもお会いしたいと言っておりました」

「ふふ……それはとても嬉しいですね。私もエルフの国に行ってみたいわ」

どうやら、フィーナは最初から親書の内容を知っていたようだ。

なるほど。フィーナが何故ムーンガーデン王国までついてきたのか、その理由がわかった。王女であるフィーナを送ることで、ガーディアンフォレスト王国側はムーンガーデン王国に対して誠意を見せているのだ。

今まで人間の国に来ることがなかったエルフの、しかも王女が来たのだ。その効果は絶大だろう。「会談については了解した。ただ我が国で行うか、ガーディアンフォレスト王国で行うか決めるのに、少し時間がほしい。明日の午前は……人と会う約束があるので、夕方にはお伝えする」

「承知しました」

「今日は部屋を用意するので、ゆっくり休んでくれ」

「ありがとうございます。人族の街を堪能させていただきますわ」

どうやらムーンガーデン王国とガーディアンフォレスト王国とのコンタクトは和やかに終わったようだ。そして国王陛下は、今度は俺の方へと視線を向けた。

「ユートよ。これまでの働き、誠に見事である。すぐにでも褒賞^{ほうしょう}を与えたい」

ガーディアンフォレスト王国もそうだが、俺はどれくらいの褒賞^{ほうしょう}をもらうのだろうか。帝国の山奥に住んでいた時には考えられないな。

「だが、あまりにも功績が多すぎて、しばらく時間をくれないか」

「俺はいつでも大丈夫です」

「そう言ってもらえると助かる……それと、そこにいるのは、もしやニューフィールド家の令嬢ではないか？」

国王陛下は俺達の背後にいるルルに視線を向けた。

二人は面識があるのか？ 他国とはいえ、王族と貴族……知り合いでもおかしくないか。

「ご挨拶が遅くなってしまう、申し訳ありません。お久しぶりです、国王陛下」

「やはりルルで間違いなかったか。二年ほど前に帝国で会った時より大きくなったな。見違えたぞ」

「少しは素敵なレディに近づけましたでしょうか」

「そうだな。もう子供扱いはできないな」

「ありがとうございます」

おお……ルルが貴族っぽい。今の姿だけなら、公爵令嬢と言っても信じられるぞ。

「それで、ルルは何故ムーンガーデン王国にいるのだ？ 正直今、我が国と帝国の関係はよくない」国王陛下の言うとおり、皇帝は関係ないとはいえ、帝国はムーンガーデン王国を乗っ取ろうとしていた。不用意に上級貴族がムーンガーデン王国に来ない方がいいと言っているのだろう。

「実は、私はユートさんとはただならぬ関係でして。帝国から追いかけてきました」

その言い方はなんだか嫌だなあ。さっきまでの公爵令嬢モードのルルはどこかに行ってしまったようだ。

「何！ まさか婚約者なのか！」

「それはご想像にお任せします」

そう言っただけでルルはうつむき、お腹を擦る。

いや、その言動だと、子供ができたから俺を追いかけてきたと思われぬ？

「やはりユートはすけこましかっただけか！」

「国王陛下、違います！ ルルは帝国にいた時、盗賊から助けただけの関係です！」

ここは火種が大きくなる前にすぐに弁明しておこう。それにしても、すけこましくてひどくね？

国王陛下は俺のことをそんな風に思っていたのか。

「何！ そうなのか？ だが今腹部を……」

「これは、国王陛下の前で緊張してしまい、お腹が痛くなってきたので擦っただけですわ」

「そ、そうなのか？」

「はい。そうですわ」

ルルは笑顔で、自分は騙すつもりはなかったとアピールする。

「わ、わかった。とりえずフィーナ王女もルルもゆくりしてくれ」

「ありがとうございます」

そして国王陛下は少し疲れた様子で、玉座の間を後にした。

ローレリアに戻った翌日の午後。

俺は、城に用意された部屋のベッドで横になり、まったくした時間を満喫していた。

ちなみに、リズとフィーナは買い物に行った。マシロとノアは、護衛として二人に同行している。

ルルは街を観光したいと言って、朝から一人でどこかへ行ってしまった。

最近忙しかったから、こんなにのんびりする時間はなかった。だけど、さすがに午後までゴロゴロしていると暇になってくる。

「俺も街に繰り出すかな」

ベッドから起き上がり、着替えをして部屋を出る。そして城門を通り、街の西区画にある繁華街へと向かった。

「らっしやいらっしやい！ 安いよ安いよ！」

「今日は新鮮な野菜が入ったよ！ 奥さん、どうだい」

「他国で仕入れた塩はいらんかね」

そこかしこから屋台の店主達の声が聞こえてくる。

人もたくさんいるし、活気もある。ほんの少し前まで、ここでクーデターが起きたなんて信じられないな。

この光景を見ると、王弟リスティヒの野望を止めることができ、本当によかった。リスティヒが支配していた時は、全然人がいなかったからな。

周囲の様子を見ながらさらに西へと進んでいくと、今度は飲食店が多く並ぶ通りに出た。すると、一つの店の前で見知った人物を発見した。

「ん？ あれは……ルルか？」

あたりをキョロキョロと見ているな。何かあったのか？

俺はルルのもとへ駆け寄り、話しかける。

「こんなところで何をしているんだ？」

「あつ！ ユートさんじゃないですか。ちょうどいいところに」

「ちょうどいい？」

……なんだか嫌な予感がするのは気のせいかな？

だけど何も聞かずに、決めつけるのもよくないな。

とりあえず話だけは聞くとするか。

「え、え……実はこのお店の巨大パンケーキが食べたくて」

「食べればいいじゃないか。まさか、大きすぎて一人じゃ食べられないかもしれないから、一緒に食べてほしいとか？」

「その通りです」

「まあ、そのくらいなら付き合ってもいいぞ」

ちようど小腹が空いてきたところだしな。

「言質を取りました。後で、やっぱり嫌だつて言うのはなしですよ」

「いいよ」

大したことじゃないと思っていたが、続けてルルが追加の情報を開示してきた。

「実はカップルじゃないと注文できないみたいで。でもユートさんは一緒に食べてくれますよね？」

「カ、カップル？ でもまあ、店の中で恋人の振りをすればいいんだろ？」

「はい」

「まあいいよ。それくらい」

「本当ですか？ ありがとうございます」

予想していなかったことだけど、思ったほど嫌な話ではなかった。

店の中で恋人の振りくらい……よ、余裕だね。

ごめんなさい。嘘をつきました。今まで恋人がいたことないので、少しハードルが高いです。

でもルルと約束してしまったので、ここは覚悟を決めるしかない。

「それでは、設定を考えたので聞いてください」

「設定？ そんなの必要ないんじゃないか？」

「何を言ってるんですか。もし店員さんになれそめを聞かれたらどうするつもりですか？ ユート

さんはアドリブで切り抜けられますか？」

「そ、それは……」

「今から言うことをちゃんと覚えて、聞かれたら答えてくださいね」

「わ、わかりました」

そこまでしなくてもいいのと思ってしまいが、ここはルルの好きにさせておくか。どうせ店内だけのことだし。

「いいですか？ 私はユートさんのことを誠実で優しい人だから好きになったという設定でお願いします」

「わかった」

「そして、ユートさんは私の顔とスタイル、童顔なところに惚れたという設定で」

「ちょっと待て！ それだと俺って最低なやつじゃない!？」

「大丈夫です。男は全員ロリコンですから。むしろ、そこを否定すると怪しまれますよ」

「えっ？ そうなの？」

この世界の男はみんなロリコンなのか？ だけどその設定は嫌だな。お願いして変えてもらおう。
「ちよつとそれは……」

「設定も作つたし、もう行きますよ」

ルルは俺の手を引いて店に入っていく。人の言葉を聞く耳は持っていないということか。でも、どうせ質問などないだろうと考えていたので、俺も店内へと入った。

「いらつしやいませ」

店に入ると、ウェイトレスさんが出迎えてくれた。

ウェイトレスさんはチェックの短いスカートで、なかなか男心をくすぐる格好をしている。

「お二人ですか？」

「はい。カップルです」

ルルは恋人をアピールするためなのか、腕を組んできた。

これでもう逃げることはできないな。

仕方ない。ルルの設定というやつに付き合つてやるか。

「ふふ……仲がいいですね。では、こちらにご案内いたします」

ウェイトレスさんは微笑みながら、窓側の席に案内してくれた。

「こちらがメニューになります。ご注文が決まりましたらお呼びください」

「あっ！ 注文は決まっています。このラブラブパンケーキセットをお願いします」

「ラブラブパンケーキセットですね？ 承知しました」

最初にアピールしたせいかな、特にカップルかどうか問われることもなかった。

後は食べて帰るだけだ。

それにしても、ラブラブパンケーキセットか……俺だったら恥ずかしくて頼めないな。

躊躇なく注文したルルを尊敬してしまう。

いや、よく見るとルルの頬は少し紅潮していた。実は本人も少し恥ずかしいようだ。でもラブラブパンケーキセットを食べるために、演技をしているといったところか。

「楽しみです」

「俺はルルが食べられなかったら、残りを食べるよ」

「そうですか。でもセットだから、アイスティーが二人分ついてくるんですよ。それはユートさん

も飲んでくださいね」

「わかった」

「絶対ですよ」

「ああ」

アイステイーを飲むくらい問題ない。それなのに、何故ルルは言質を取るような真似をするのか、俺は深く考えなかった。

しかしウェイトレスさんがラブラブパンケーキセットを持ってきた時に、その理由がわかった。

「お待たせしました。こちらがラブラブパンケーキセットになります」

ウェイトレスさんは注文した物をテーブルに置いていく。

「デカ！」

皿に盛ったパンケーキは通常の大きさの五倍はあり、これはリズが食べるものなんじゃないかと疑ってしまうほどだ。

だが、それ以上に驚いたのが飲み物だ。

グラスは一つしかなく、そこにストローが二本刺さっていた。

「うわあ！ これ二人で吸うとハートができるやつですよ」

「はい。こちらの飲み物は必ず二人一緒に飲んでください。それがカップルの証明になりますので」

「わかりました」

わかりましたじゃないよ！ これ、めっちゃ恥ずかしいやつじゃん！

知り合いに見られたら、一生ネタで言われるよ。

だが幸いなことに、ローレリアに知り合いはほとんどいない。

がんばれば飲めなくはないが……

「これ、本当に飲むの？」

俺はウェイトレスさんが去った後、小声でルルに問いかける。

「もちろんですよ。私に喉の渇きで死ねって言うんですか？ 砂漠の中で水を飲むなって言うようなものですよ」

「いや、パンケーキ食べた後にアイステイー飲まなかったくらいで死なないだろ」

「それよりパンケーキですよ、パンケーキ」

もう俺の話より、パンケーキに目を奪われている。まあ、これが食べたかったからこの店に入っただ。仕方ないか。

ルルはさっそくナイフとフォークを取り、パンケーキを口に運んでいく。

「うーん美味しいです。ほら、ユートさんも食べてください」

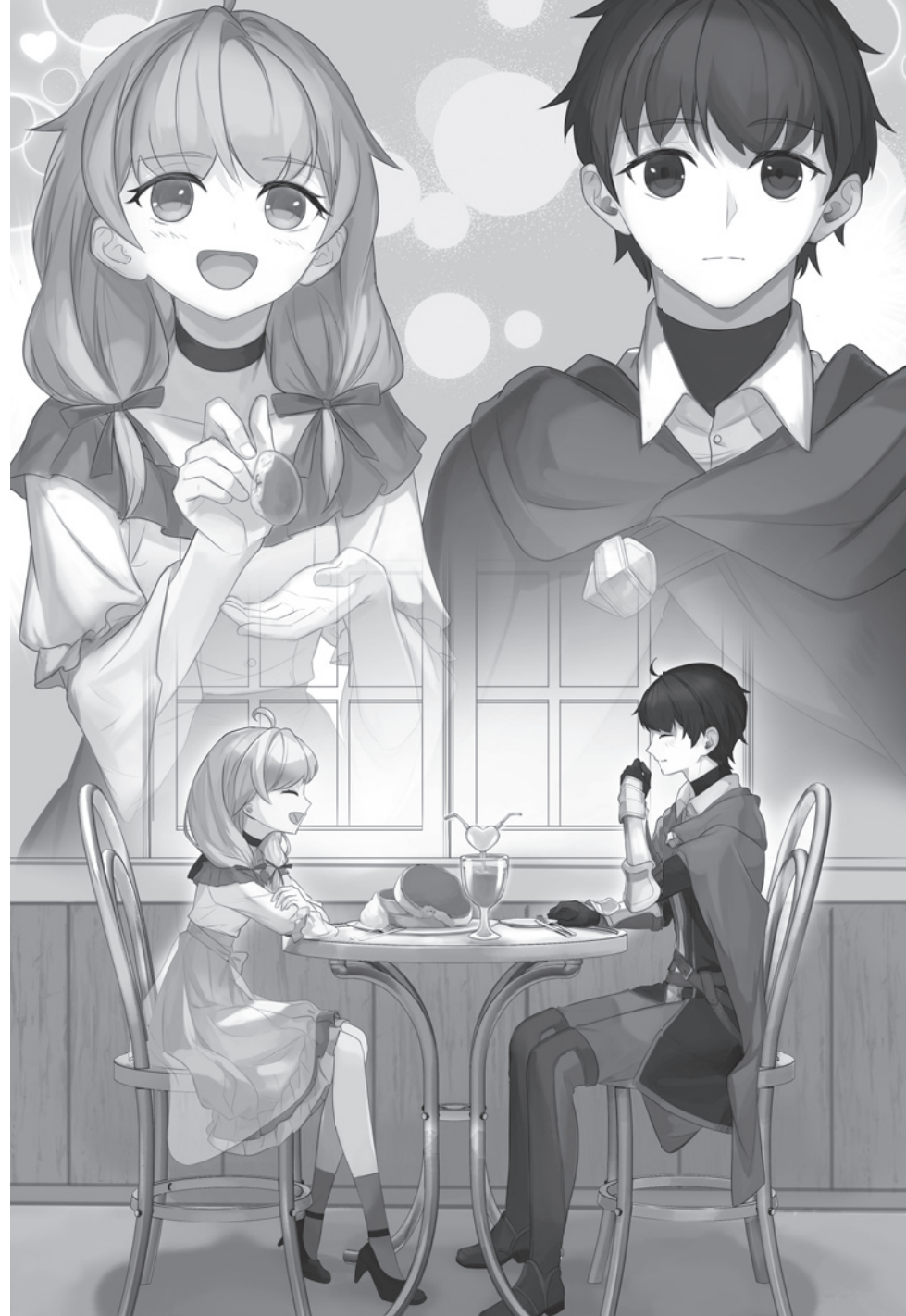
目の前にパンケーキが刺さったフォークが出される。

俺はそれを反射的に食べてしまった。

「どうですか？ 美味しいですよね？」

「た、確かに旨いな。ルルが食べたがっていたのも頷ける」

パンケーキは想像していたより美味しかった。ただ、それよりも気づいてしまった。



思わず食べてしまったけど、これって間接キスだよな。
そう認識すると、途端に恥ずかしくなってきた。

でも、ルルは別に気にしていないようだ。俺だけが気にしているのもなんだかカッコ悪いな。ここは平常心で行こう。

「どうしました？ 私との間接キスに感激しちゃいましたか？」

不意に目が合うと、ルルは小悪魔のような笑みを浮かべてきた。

「べ、別にこれくらい大したことないね。ルルこそ顔が赤くなってないか？」

「ふくん……ユートさんはこれくらいじゃ動じないと」

「当たり前だろ」

「でしたら、私は喉が渴きました。アイスティーと一緒に飲みましょ」

「えっ？」

やっぱり飲むの！

だけど、年上の威厳を保つために強気の発言をしてしまったので、今さら嫌だとは言えない。

「わ、わかった」

「ほら、ユートさんも、もっと顔を近づけて」

ルルに促され、ストローに口を近づける。ルルの顔が間近になり、恥ずかしくなってきた。

ん？ でもよく見ると、ルルの顔もすごく赤くなってないか？

どうやら、恥ずかしいのは俺だけじゃないようだ。

「そ、それじゃあ飲みますよ」

「あ、ああ……」

周りは俺達のことを見ていないよな？

こうなったら早く飲んで終わらせてしまおう。

俺はストローに口をつけて、アイステイーを飲む。

恥ずかしくて熱くなった身体が冷えていく。

そしてある程度飲んだところで、ストローから口を離れた。

これをあと数回やらなきゃいけないのか。恥ずかしすぎる。

俺は、ルルがどうなっているのか視線を送る。

すると、ルルはうつむいていて、俺と目を合わせてくれない。

そんなに恥ずかしいなら、この店に来なきゃいいのに。

けど残すのはもったいないから、とりあえず目の前のパンケーキとアイステイーはなんとかしたいとな。

俺はルルに食べるように促そうとしたが、それを口にするのができなかった。何故なら突如俺達のテーブルの席に座った者がいたからだ。

えっ？ 誰？ 正装をしているからこの店の店長か？ もしかして、俺達が本当にカップルかどうか確認しに来たとか？ だけどここの人、明らかに不機嫌な顔をしているよな？ 店員が客に対してそんな態度を取っていいのか？

「お前達はどうしてこの店にいるんだ？ 恋人同士なのか？ この子のどこに惚れたんだ？」

げっ！ やっぱりカップルかどうか聞いてきたから、この店の店長なのか？ ここはルルと話を合わせるために、さっきの設定を言わなくてはならないのか。

ルルは変わらないうつむいたままだ。やはり俺が言うしかないのか。

そして俺が口を開こうとした瞬間――

「パ、パパ……」

ルルが聞き捨てならないことを口にする。

えっ？ パパってことは、帝国の公爵ってことか！

「見つかったじゃないか」

「やはりムーンガーデンにいたのか。ユートを追っているのではないかと思ったが、本当にいるとはな」

「まさか私を追いかけくるとは思いませんでした」

「お前を追いかけてきたわけじゃない。仕事でローレリアに来ただけだ」

どうやら、ルルのお父さんで間違いなさそうだ。そして話からして、公爵は娘であるルルのことをあまり大切に思っていないように感じられる。

とはいえ、顔とスタイル、童顔なところに惚れたという設定を口にしなくて、本当によかった。もしかしたらルルに対する今の態度は外向きの演技で、実はとても大切に思っているということだったら、剣の錆さびになっっていたかもしれないな。命拾くわいだぞ。

「それで、君がユートか？」

「は、はい」

「その節は娘が世話になったな。私はルルの父親で、ダグラス・フォン・ニューフィールドだ」
まさかこんなところで、ルルの父親に会うとは思わなかった。

仕事で来たって言うってたけど、なんの仕事だろう。

「それにしても、随分娘と仲よさそうにしていたな。まるで恋人のように見えたぞ」

「えーとそれは……」

今の言い方だと、パンケーキを食べさせあっていたことや、アイステイーを二人で飲んでいたところを見られたというわけか。

このまま勘違いされたままはまずいよな。正直に話した方がいいだろう。

「ユートさんユートさん」

俺が真実を口にしようとした時、ルルが俺の腕を引っ張り、小声で話しかけてきた。

「ここで本当のことを言ったら、店の人達にも私達がカップルじゃないってバレちゃいますよ。私、このパンケーキをまた食べたいから、出禁になるのは困ります」

「でも、嘘をつくのはどうかと」

「大丈夫です。パパは私に彼氏ができたら泣いて喜んでくれますよ？」

「なんで疑問系なんだ？ 彼氏が憎くて泣くの間違いじゃないか？」

「ともかく真実を言うのはやめてください。いいですね」

ルルに念を押されてしまう。

「見ての通りの関係です。何か異論でもありますか？」

「いや。お前は嫁に行くことはないと思っていて。それに、元勇者パーティー、ムーンガーデンを救った英雄となれば、私に異論はない」

ルルは上手く濁したな。恋人ではないと言も口にしていないから、これで店の人にバレることはないだろう。

それにしても、公爵はルルが嫁に行かないと思っていたのか？ 性格はともかく、見た目は美少女だから選びたい放題だと思うけど。あと、俺に否定的な感情を持っていないようで安心した。

よくもううちの娘に手を出したな！ 公爵家の力で貴様を潰してやる！ という展開にはならなそうだ。いや、このまま恋人と間違えられたままなのも嫌だけど。

「私のここでの仕事は終わった。帝国に戻るが、お前はどする？」

「私はここに残ります」

「それがいいだろう。何をしようが文句は言わんが、ニューフィールド家の品位を下げるような真似だけはするなよ」

そう口にするとう公爵は席を立ち、店の外に出ていってしまった。

なんだか今の親子のやり取りを見て思ったが、二人は仲がよくないのか？ よその家のことだから聞くに聞けないし。

「それでは邪魔者がいなくなったから、残りを食べましょう」

第二章

「ああ」

公爵の登場で重苦しい雰囲気となったが、ルルは笑顔でパンケーキを食べ始めた。今思い返してみれば、公爵が来てからルルに笑顔がなかったよな。

公爵のことを聞いてみたい。だけど、その笑顔を曇らせたくないだったので、聞くのはやめた。すると、ルルが突然パンケーキを刺したフォークを俺の頬に当ててきた。

そのせいで、パンケーキのクリームが俺の頬についたぞ。

「ボーッとして、どうしました？　せっかく私が食べさせてあげようとしたのに……はっ！　まさかこの頬についたクリームを舐めろと！　さすがはユートさん、策士ですね」

「勝手に捏造しないでくれる？　それより、早くここを出たいから、さっさと食べるぞ」

「ふふ……なんだかんだ言って、ユートさんもこのパンケーキが気に入ったんですね。それともまた間接キスがしたいとか？」

「はいはい。もうそれでいいから」

「扱いが雑です！　いつからそんなひどい人になったんですか？」

「最初からだよ」

「ひどいです」

ルルの嘆きの声が店内に響き渡る。

そして俺達はラブラブパンケーキセットを改めて食べていくが、ルルと公爵のやり取りが気になつてしまい、俺は食べることに集中できなかった。

ルルとラブラブパンケーキセットを食べた後で城に戻ると、俺は国王陛下に呼ばれた。

なんの話だろう？　まさか褒賞についてか？　いや、昨日しばらく時間をくれと言っていたので、

それはないだろう。

正直、なんのために呼ばれたのかわからない。

俺は警護をしている兵士の案内で、国王陛下のいる部屋に通された。

「ユートよ。よく来てくれたな」

「いえ、それよりなんのご用でしょうか」

「実はエルフとの会談なんだが、我が国ではなくガーデンフォレストでやることに決めようと思う」

会談は国同士で行うから、俺には関係ないよな？

「どうして俺にそのことを……」

「実はエルフの王からの手紙には、もし会談をガーデンフォレストで行う場合は、ユートを連れてきてほしいと書いてあったのだ」

「俺を、ですか？」

どういうことだ？　何故会談に俺が行く必要があるんだ？　エルウッドさんの意図が読めない。

「それでどうだろう。ユートも一緒にエルフの国に同行してくれないか。既にエルフとの友好関係